

2020 年度卒業論文

男性ファンダム研究
—女性アイドルのファンと彼らのコミュニティー—

鈴見 駿

目次

はじめに	1
第 1 章 女性ファンを対象にした先行研究	1
第 2 章 本論の視座	6
2.1 分析視角	6
2.2 本論の問い	8
2.3 調査の方法	9
第 3 章 男性ファンの活動とコミュニティ	12
3.1 活動内容	12
3.2 ファンコミュニティ	13
第 4 章 男性ファンのまなざし	15
4.1 アイドルの関係へのまなざし	15
4.2 多角的なまなざし	16
4.3 性的なまなざしの排除	19
第 5 章 ファンとコミュニティの関係	21
5.1 個人とコミュニティのまなざしの一致	21
5.2 他の男性コミュニティにおける経験との比較	23
第 6 章 鏡としてのアイドル	27
第 7 章 男性ファン再考	30
参考文献	33

はじめに

本稿では、日本の女性アイドル¹グループを応援する若い男性ファンを研究対象にしてインタビュー調査を行った。その結果に基づき、彼らの女性アイドルへのまなざしと認識、ファン個人とファンコミュニティの関係という観点から、E.K.セジウィックが提唱した家父長制を支える社会装置に彼らがどう対応しているかを考察する。

これまで男性ファンについては、ステレオタイプなイメージが先行し、ジェンダーの非対称性を助長する存在として描かれてきた。しかし、筆者が女性アイドルグループの一ファンとして活動をしていて感じたのは、男性ファンの活動を従来のステレオタイプの枠組みで理解することは困難だということである。

本研究を通して彼らについての説明の再考を促すとともに、男性のジェンダー問題への対応について新たな洞察を得ることを目指す。

第1章 女性ファンを対象にした先行研究

女性アイドルを応援する男性ファンについての学問的な考察はほとんど行われておらず、研究の蓄積がない。一方で、男性アイドルを応援する女性ファンを対象にした研究はこれまでいくつも行われており、興味深い考察がなされている。そこで本研究では、ジェンダーの非対称性に考慮しつつ、女性ファンを対象にした先行研究を参照して分析を進める。以下で、先行研究を概観する。

男性アイドルを応援する女性ファンとして研究の対象になっているのは、ジャニーズアイドルのファンがほとんどである。ジャニーズアイドルとは、1975年に設立された芸能事務所であるジャニーズ事務所に所属する男性アイドルの総称である。現在、「嵐」、「関ジャニ∞」などの人気の高いアイドルグループと、練習生的な位置づけの「ジャニーズ Jr.」が多数在籍している。これまで数多くの人気アイドル輩出しており、設立以来、日本の男性アイドルシーンをけん引している。ジャニーズアイドルはグループ数が多く、比例してファンも多いため実態が掴みやすく、またグループ単位にとどまらず事務所単位で独特のファン文化が

¹ 現在「アイドル」は多様化が進み、「アイドル」を名乗る人々の間でも活動の規模や方針によって実態が大きく異なることも珍しくない。そこで本研究では混乱を防ぐために、「アイドル」という言葉を、「全国規模である程度の人気と知名度を獲得しているグループアイドル、あるいはそこに所属する人物」と定義して使用する。アイドルグループ内の個人を想定する場合は「メンバー」と呼称する。

形成されているため、注目を集めてきた。

まず、研究対象である女性ファンのイメージをつかんでもらうために、先行研究を参考に女性ファンの活動内容を記述する。活動内容については、徳田真帆（2010）、陳怡禎（2014a、b）、臺純子ほか（2018）などに詳しい。

彼女たちによって挙げられた具体的なファン活動は、CD や DVD の購入、応援しているメンバーが出ているテレビ番組や雑誌のチェック、ファン同士でカラオケに行き振付や合いの手を入れてながらコンサートのように楽しむ「ジャニカラ」、応援しているメンバーの誕生日やデビュー記念日などを祝う会の開催、コンサートやイベントへの連れ立っての参加などである。コンサートへの参加は特に重要な活動で、特徴的な行動が見られる。例えば、コンサート中にメッセージや自分の応援するメンバーの名前を書いたうちわを持って応援する行動は多くのファンが実践するという。これにより自分の応援するメンバーをアピールしたり、投げキスやウインクなどの反応をメンバーから引き出そうとしたりするのだ。また、コンサート当日は、メイクやファッションなどのオシャレにいつも以上に気を遣う女性ファンが見られるという。中には、コンサートの日程に合わせて美容室やエステに行く、ダイエットをするなどの行動をとる者もあり、日常生活に影響を与えるほどコンサートへの参加が重要な活動として位置づけられていることがわかる。もちろん個人や応援するグループによって違いはあるが、女性ファンはおおむねこのような活動をしているという前提に基づき、先行研究で注目されている点や社会学的考察の紹介へ移る。

辻泉（2014）は、ファンを「当事者」と「観察者」の2つに類型化して分析を行った。「当事者」としてのファンはアイドルを異性愛の枠組みでとらえ、疑似恋愛の相手あるいは理想の彼氏として彼らに熱中するという、いわば世間でイメージされるアイドルファンのステレオタイプに近い存在である。一方で「観察者」としてのファンは、メンバー同士の関係を一定の距離を置いて眺め、同時にファン同士で円滑な関係を築くことに尽力するという。辻（2014）は、近年女性ファンが「当事者」から「観察者」に移行する、「観察者化」が見られると主張した。実際、最近の研究は「観察者」としてのファンを対象にしたものが多く行われており、これから紹介する研究もそこに含まれる。彼女たちは1人のメンバーに注目するだけではなく、メンバー同士の関係性を俯瞰的に見つめるため、BL・やおい研究の視点をを用いた分析もなされている。

先行研究では、女性ファンが男性アイドルにどのようなまなざしを送り、彼らをどのように認識しているかが注目されている。

徳田（2010）や陳（2014a）は、女性ファンがジャニーズアイドルを中性的、あるいは少年的な存在として捉えてまなざしを送っていると指摘している。徳田（2010）は、ジャニーズアイドルの BMI 値の平均値が日本人男性の平均値を下回っているというデータから、彼らは身体的に男らしいイメージが希薄であると述べている。陳（2014a）は、男性アイドルに対して女性化した呼称を用いたり、「かわいい」という表現を頻繁に用いたりするファンの行動を例示して、「女性ファンによる男性アイドルの性別の攪乱が意識的に行われている」（陳 2014a：120）と分析している。このように、女性ファンのジャニーズアイドルへのまなざしには、二分法的なジェンダー観から脱した“脱性的な”（陳 2014a：150）性格が見られる。彼女たちはアイドルの男らしさに必ずしも注目せず、そのため彼らを疑似恋愛の相手や理想の男性と見なさないのだ。

一方で女性ファンのまなざしは、アイドルの関係性や仲の良さに向けられている。辻（2014）は人気ジャニーズアイドルの「嵐」を応援する女性ファンについて、「彼女らの多くが『嵐の5人が仲良くじゃれ合っている様子を眺めているのが一番楽しい』と答える」（辻 2014：30）と指摘し、吉澤夏子（2012）も、「女性は何よりも、男性アイドル・グループの『グループ性』、つまり『メンバーの関係性』に志向」し、「ライトなファンからコアなファンまで、またやおいに無関心な人、やおいに嫌悪感をあらわにする人でも、メンバー同士の『絡み』や『わちゃわちゃ』が大好きである」（吉澤 2012：149）という指摘によって彼女たちの「関係」への関心を主張した。メンバー同士が「わちゃわちゃ」と「じゃれ合う」さまが彼女たちの視線を集めるのだ。

このようなアイドルの関係への注目の延長として、「J 禁」が挙げられる。台湾の女性ジャニーズファンを研究した陳（2014a）は、イラストや小説作品などのジャニーズアイドルを題材にしたやおい的な創作活動、すなわち「J 禁」に言及している。「J 禁」は「ジャニーズ事務所（=J）が閲覧することを禁止する」という意味で、日本では会員制サイトや特定のイベントでの販売という形で、アンダーグラウンドな領域でのみ流通している。一方、台湾では「J 禁」を気軽な遊びとして捉え、誰でも参加できるネット掲示板といった公開の場でもカップリングゲーム²のような発言をするファンが見られるという違いが指摘されている。

² 陳（2014a）では詳しく説明されていないが、「特定の2人を特別なペアと見なし、その関係性に注目したり想像を膨らませたりする行為」程度の意味だと思われる。嵐から一例を挙げると、大野智、二宮和也のペアは「大宮」というペア名を与えられ、2人の関係が注目されている。同様の現象は女性アイドルにおいても見られ、ももいろクローバーZを

様式に違いはあるが、いずれもメンバー同士の強い絆を読み替え、特別な関係であることを強調するものであり、アイドルの関係への強い関心がうかがえる。

アイドルへのまなざしは、ファンコミュニティにも影響を与えている。特徴的な現象としてしばしば言及されるのが、「同担拒否」と「禁止担」³である。

「同担拒否」は、自分と同じメンバーを応援するファンを避けたり攻撃したりする現象である。これは、ファンがメンバーと自分の間に特別な関係を志向するために、同じメンバーを応援する他のファンを「嫉妬の対象やライバル」(辻 2004: 253)と見なすため起きるといえる。アイドルを疑似恋愛の対象のように認識する「当事者」としてのまなざしが反映された行動と言えるだろう。

「禁止担」は、ファン同士でネットワークを築く際に、特定のメンバーを応援しているファンは“禁止”、つまりあらかじめ断って交友関係を築かないという現象であり、それ以前に交友関係のあるファンの友人と、応援しているメンバーが被らないようにという配慮から起きると言われている。具体例を挙げると、アイドル A を応援している友人がすでにいる場合、A を応援するファンは友人として募集しないということだ。「禁止担」を忠実に実践すると、仲間内には、1人のメンバーにつき応援しているファンが1人いることになり、応援するグループの関係とコミュニティの成員同士の関係が写し鏡のようになる。

辻 (2014) は、近年「同担拒否」が見られなくなっており、代わりに「禁止担」が広く見られるようになってきたことを指摘しており、その理由を、女性ファンの関心が自分とアイドルの関係だけではなく、メンバー同士の関係や自分と他のファンとの関係に対しても向けられるようになったため、すなわち「観察者化」と結びつけて説明している。

「禁止担」に見られるようなファンコミュニティとアイドルの関係の対応関係は、陳 (2014a) も指摘しており、「男性アイドルから読み取れる同性同士の理想的な関係性と、女性同士が構築する同性同士の関係性との構造の一致」(陳 2014a: 188)が見られると言う。研究対象である台湾の女性ファンは、本来は商業的成功という目的のために戦略的に結成さ

例にとると、百田夏菜子、玉井詩織のペアは「ももたまい」というペア名で、2人の関係が注目の対象となっている。ただし、2人の関係を恋人と見なすか友人と見なすかなど、想像の程度は個人によって異なる。

³ ジャニーズファン文化では、応援するメンバーを「担当」と表現し、「担」はこの省略形である。例えば A というアイドルを応援するファンは、担当が A ということになり、「あの人は A 担だよ」というように使われる。

れているアイドルのグループを、共通の目標や彼らの仲間意識から構築されている不変的で唯一無二のものと考えようとする。このイメージは、階層や地縁・血縁などの外在的要因ではなく、同じアイドルを応援しているという趣味、あるいは感情のつながりによって形成されているファンコミュニティのイメージに重なるものである。ファンはアイドルグループの関係を鏡として自らの交友関係を見つめ直し、コミュニティ形成を通して理想の関係を追求していると言えるのだ。

ではなぜ、女性が男性同士の関係に注目し、自らの人間関係と結びつけるのだろうか。これについては、東園子（2015）の宝塚ファンを対象にした分析を参考にすることができる。宝塚はジャニーズとは違い女性のみがステージに上がるが、女性ファンが多く独自のファンダムが形成されているという共通点がある。東は、ファンたちがタカラジェンヌへ向ける視線が多層的であると指摘した。彼女たちによって見出されているのは、ステージ上での姿、ステージ外での公開された姿、公開されていないプライベートな姿であり、これらの姿が重ね合わされることで、ステージ上でタカラジェンヌが演じる男性間の友情や男女間の恋仲が、ステージを降りた彼女たちの関係にも適用され、女性同士が強固な絆で結ばれているように読み替えることができるという。女性の友情を読み取るために男性間の友情や男女間の恋愛関係が必要とされる理由は以下のように説明されている。社会的に異性愛関係が最も優位な関係と見なされ、男性間の友情も公的な絆として認められている一方で、女性間の友情は“不可視化”され、成立しないものと見なされている。そこで女性ファンは、社会的に認められた男女間あるいは男性間の関係の型を、女性同士の関係に転用することで、女性間の友情を読み取ろうとしているのだ。女性ファンが男性アイドルの関係を自らの関係に反映させようとするのも、彼らの親密性の型を借りて自らのコミュニティにおける同性間の親密性を追求しようとしているためだと考えられる。

以上の女性ファンの行動は、「虚構を虚構として享受する」（吉澤 2012：164）実践だと言える。吉澤（2012）は、アイドルとは実体のない偶像であり、現実に対応物のない虚構であり、だからこそファンの多種多様な思いや視線を受け止めることができると指摘した。その上で、「わちゃわちゃ」といったアイドルの関係に注目する際、それを見つめる女性ファン自身は不在になり、主体が空虚になるため、関係への注目はファン自身を含め虚構化されていると述べた。この視座から先行研究の内容を振り返ると、男性アイドルを脱性的な存在と位置付けるのは、彼ら自体の虚構性を強める実践であり、「J 禁」のようにメンバー間の関係を恋愛関係に読み替えるのは関係の虚構性を強化する実践と言える。このようにして虚構性

が強められるからこそ、男性アイドルに女性同士の親密性への志向を照射することができるのだ。

「観察者」的な女性ファンの行動は、女性間の友情が“不可視化”されているという社会的状況において同性同士の親密性を志向するものと言える。男性アイドルへのまなざしは脱性的で、彼らの関係に向けられたものだ。彼らを二分法的なジェンダー構造から離れた脱性的な存在ととらえることで、男性アイドルを自らに引きつけることが可能になる。閉じられたグループやコミュニティの中での仲の良さに注目するのも、「J 禁」やカップリングゲームのような同性愛的な形式をとるのも、同性間の関係に排他性を付与し、異性によって楔を打たれない強い絆を見出そうとするためである。

女性は男性との関係を優先するように社会から要請されるため、女性間の関係は劣位に置かれ、もろく移ろいやすいものとされる。彼女たちは、男性アイドルの関係の型を自らのコミュニティに借用することで、このような困難を解決した同性間での親密性を追求しようとしていると言える。

第2章 本論の視座

2.1 分析視角

以上のような女性ファンを対象にした研究をふまえて、本章では本論の視座を説明する。本論では、女性アイドルを応援する男性ファンを研究対象とし、彼らを個人レベルと集団・関係性レベルの2つのレベルから分析をする。その際に分析視角として、セジウィックを中心とするフェミニズム的観点からのホモソーシャリティ研究を用いる。

初めに、セジウィックの理論を概説する。彼女の提出したホモソーシャル、ミソジニー、ホモフォビアという3つの概念は、それぞれが絡み合い作動することで、家父長制における男女の非対称性を産出する。家父長制は男性の社会的な連帯、つまりホモソーシャルを基盤としており、女性を異性愛の枠組みの中で男性のパートナーとして制度内に取り込む。異性愛においては、男性が目的として欲望するのは女性自身であるように見えるが、実際は自身を男性として認めてもらい、権力へアクセスするために男性の連帯の中に参入することが目的化されているので、女性はそのための手段として客体化され、周縁に置かれる。このように男性が権力を独占するために女性を排除する仕組みが、女性蔑視とも訳されるミソジニーである。家父長制を維持するためには、男性を主体、女性を客体とする構図が必要なのだ。しかし、男性同性愛は主体であるはずの男性を客体に位置づけ、男性の支配装置を揺るがす

おそれがある。そのため男性集団は同性愛的なものを嫌悪し、排除の対象とする。これがホモフォビアである。すなわち、家父長制は男性が同性のみで連帯し、女性を異性愛の枠組みで認識し、他者化するという仕組みに支えられているのだ（Sedwick 1985=2001）。ここには、ジェンダー間に明らかな非対称性が見られ、男性と女性では経験する世界が大きく異なる。

家父長制の下で女性に要求されるのは、同性間の関係よりも異性との関係を優先し、男性との異性愛関係において自己実現することである。男性側からすると、自らの優位を維持するためには異性愛を通して女性を制度に組み込み、制御下に置く必要があるのだ。制度の維持のためにこのような要求がなされるのだ。実際、男性集団に権力が集まっている状況では、女性は権力に近づきたい状況に置かれており、男性とつがうことが権力へ接近する最も有効な手段となる。前章で触れたように、女性同士の関係が脆弱なものと想定されるのはこのような理由による。ここでは女性は男性の論理によって支配されている。

これを踏まえて先行研究の内容に目を向けると、女性ファンの実践は家父長制的構造に対する女性側からのカウンター実践として解釈することが可能である。「当事者」的に疑似恋愛の相手として男性アイドルに熱中するのは、家父長制に迎合的であると言える。しかし、先行研究で主な対象となっていた「観察者」的な女性ファンは、男性アイドルを二分法的なジェンダー構造から引きはがし、関係への注目を通して彼らを徹底的に虚構化していた。これによりファンとアイドルの間から、男女を隔てる異性愛的な枠組みが取り払われ、彼女たちは性別越境的に男性アイドルを自らに引きつけることが可能になる。結果、女性ファンは男性の関係の型を利用して、家父長制では不可視化されている女性同士の親密性を志向することができるのだ。この実践は男性であるアイドルと自らの間に異性愛的関係を想定せず、自らと連続させ、女性同士の親密性を志向するという点で男性の論理に反する性格を見出せる。

では、家父長制の下で男性はどのような要求を受けるのだろうか。簡潔に言えば、男性集団に同一化し、異性愛における主体として女性を求め、同時に彼女たちを他者化することである。上野千鶴子（2018）がセジウィックを踏まえて「男は男たちの集団に同一化することをつうじて『男になる』。男を『男にする』のは、他の男たちであり、『男になった』ことを承認するのも、他の男たちである」（上野 2018：284）と指摘したように、男性個人は男性集団に大きく依存している。そのため、男性は集団に自己同一化し、集団適合的なふるまい、つまり女性を異性愛の枠組みでとらえ、自らと非連続的な存在として位置づけることを要求

されるのである。ここでは、女性個人に向き合い理解する必要がない。「女を『他者化』するとは、その実自分の手に負える『他者』のカテゴリーに女を抑え込むこと」(上野 2018:25)という指摘は、家父長制においては男性にとって女性は“幻想的”な存在、言い換えると“虚構”であり、リアリティが求められないことを示す。異性愛的枠組みで男性が女性に向き合う際、彼女たちへの理解は一面的なものになるのである。

これを踏まえて、男性ファンのステレオタイプへの分析に目を向ける。吉澤 (2012) は女性ファンについて考察したのと同じ文章で、女性ファンに比べ男性ファンが世間に受け入れられづらいと指摘し、その理由を以下のように考察した。男性は女性アイドルへ「所有」の欲望を向けるため、アイドルに向き合う際に女性ファンのように自らを不在にできておらず、現実にとらわれている。そのため、男性ファンの欲望は虚構の存在としてのアイドルではなく、彼女たちの生身の身体に向けられているように見え、その現実と虚構の落差が「気持ち悪い」という拒絶反応を引き起こす (吉澤 2012: 150-151)。吉澤の指摘は男性ファンが女性アイドルの「所有」を志向することを前提にしているが、「所有」の欲望とは女性を男性の制御下に置くことを志向するものであり、家父長制と親和的である。このように男性ファンには家父長制と結びついたネガティブなイメージが定着し、それに基づいてフェミニズムの立場からの批判を受けたり、家父長制を助長する存在として描かれたりしてきた。

しかし、彼らの行動は本当に家父長制を助長するのだろうか。男性ファンへのステレオタイプのイメージは、彼ら自身ではなく外部が形作ったものであり、その実態についての詳細な分析はなされていない。男性ファンを論じる際にまず目を向けるべきは、この前提が果たして有効なのか、という点であろう。男性アイドルに熱中する様子が異性愛的に見えた女性ファンの実践が、実際は家父長制へのカウンターであったように、男性ファンの行動を改めて分析することで新たな知見が得られる可能性は十分にある。

2.2 本論の問い

そこで、具体的なリサーチクエスションとして以下の3つを設定した。

- Q1 男性ファンは女性アイドルにどのようなまなざしを送っているか
- Q2 ファン個人とファンコミュニティは相互にどのように作用しているか
- Q3 ファンコミュニティにおける女性アイドルへのまなざしと他の男性コミュニティにおける女性へのまなざしはどう異なるか

先行研究では、女性ファンの男性アイドルへのまなざしの特徴として、脱性的でメンバーの関係に向けられていることが指摘されていた。Q1 ではこれを踏まえ、これまで異性愛的枠組みによってのみ語られてきた男性ファンの女性アイドルへのまなざしを改めて検証することで、女性アイドルのどのような部分が注目されているか、彼らの中でアイドルはどのような存在なのかを明らかにすることを目指す。

Q2 について、女性ファンを対象にした先行研究ではファン個人の持つ親密性への志向が、「禁止担」のような形でファンコミュニティに反映され、その形成に作用していることが明らかになった。そこでは、ファン個人が持つ価値観がコミュニティで共有されていた。家父長制的な社会においては、男性個人と男性集団の結びつきは強い。そのため、男性ファンを分析するにあたって、男の論理を生産する場、つまり男性集団の存在は十分に考慮すべきである。男性ファン個人だけではなくファンコミュニティ、そして個人とコミュニティの関わりに目を向け、両者の間でどの程度価値観やまなざしが共有され、両者がいかに作用しあっているのかを調べる。

Q3 は、先行研究であまり触れられていなかった部分である。ファンコミュニティにおける女性アイドルの位置づけを、他の家父長制的な性格を持つ男性コミュニティにおける女性の位置づけと比較することで、男性ファンの特徴を浮かび上がらせることができると考え、問いを設定した。

この3つの問いの検証を通して最終的に明らかにしたいのが、「男性ファンの実践は家父長制といかに関係しているか」という問いである。吉澤（2012）の指摘に見られるような男性ファンが家父長制的な存在であるというステレオタイプの有効性を検証し、彼らの実践の新たな側面を明らかにすることを目指す。

2.3 調査の方法

続いて、研究方法について説明する。本論では、女性アイドルを応援する男性ファンへの聞き取り調査をもとに、彼らの活動についての考察を行う。彼ら自身の語りを資料として用いるのは、メディアや外部によって作られたイメージや固定観念ではなく、ファンである彼らの自己認識から男性ファンの姿に迫りたいと考えたためである。

調査対象は、女性アイドルグループを応援している若年男性と設定する。若年者を調査対象者として設定したのは、若年者はその時代の価値観や社会を反映する存在であると考えた

ためである。ある時代に人気を集めるアイドルは、その時代の社会、文化や価値観と無関係ではありえないので、近年のアイドルファンの実態を考えるにあたっては、近年の社会・文化の中で価値観を身に付けてきた若年者に目を向けることが効果的だと考えた。

次に、インタビュー対象者の選定について説明する。今回の調査では対象者の女性認識や、性に対する価値観についてなど、個人的な領域に踏み込んで聞き取りを行った。そのため、筆者とあらかじめ親交のある友人、あるいは友人に紹介された人物をインフォーマントとして選定した。友人をはじめとする身近な人物を調査対象者とするため、研究結果を男性ファン全体に一般化はできないことを断っておく。

また、選定の際は応援するグループも考慮し、全国規模で活動する日本人女性グループを応援しているファンを選定した。これは、ジャニーズアイドルを応援する女性ファンについての先行研究を参考にする際、調査対象者の応援する女性アイドルも同様の活動規模とグループ性を有している必要があると考えたためである⁴。

今回のインフォーマントが応援するグループは大きく分けて2つに分類でき、構成や活動内容に違いが見られる。

ひとつが「坂道シリーズ」であり、「乃木坂 46」、「日向坂 46」、「櫻坂 46（現在「櫻坂 46」に改称）」がここに分類される。いずれも秋元康によってプロデュースされたアイドルであり、それぞれ数十人規模で活動している。「乃木坂 46」、「櫻坂 46」は選抜制度を導入しており、人気などを考慮して曲ごとにパフォーマンスを行うメンバーの顔ぶれや立ち位置が変更される。また、メンバーは「卒業」という形で、アイドル活動に区切りをつけグループを離れることが慣例化しており、その一方で定期的に新しいメンバーが加えられるため、絶えず構成員の入れ替わりが見られるグループでもある。活動面では、新曲の発売などに合わせて握手会を開催しており、メンバーとファンが直接交流する機会があることが特徴である。人気メンバーはテレビ番組等のメディアにも多く出演しており、ライブや音楽番組に限らず幅広い活動を行っている。

もうひとつが「ももいろクローバーZ」、「私立恵比寿中学」、「超ときめき♡宣伝部」を含む、大手芸能事務所スターダストプロモーションに所属するアイドルグループである。いず

⁴ 近年、男性グループ「BTS（防弾少年団）」、女性グループ「TWICE」といった韓国発のアイドルグループが大きな人気を集めている。しかし、日本のアイドルと韓国のアイドルは特徴が大きく異なり、ファンの特徴も異なっていると考えられる。そのため本研究では、日本の事務所に所属し主に日本人が参加するアイドルに絞って分析を行う。

れのグループも 5 人前後の少人数で活動しており、メンバーの入れ替わりがあまり見られず、固定されたメンバーで数年から十数年に渡って活動を行っている点が特徴的である。活動面では、ライブに軸足を置いて活動を行っており、握手会などのファンが直接交流できるイベントはまれにしか、あるいはまったく開催されない。

表 1 では調査対象者の年齢、ファン歴、現在応援しているグループ、過去に応援していたグループをまとめている。調査は計 5 人に対して実施された。A、B、C、E は筆者の友人であり、D は C からの紹介で調査に参加してもらった。なおインフォーマント同士の関係は、A と D が中学校の同級生、B と C が高校の同級生であり、アイドルを応援する前からお互いに親交があった。現在 A と D、B と C はそれぞれ共通のグループを応援しているため、アイドルという趣味を通じて同じコミュニティに属している。

表 1 インフォーマントのプロフィール

番号	年齢	ファン歴	現在応援しているグループ	過去に応援していたグループ
A	22	2年半	乃木坂46 日向坂46	なし
B	22	4年	私立恵比寿中学 超ときめき♡宣伝部 ももいろクローバーZ	乃木坂46 欅坂46
C	22	2年半	ももいろクローバーZ 超ときめき♡宣伝部 私立恵比寿中学 乃木坂46	なし
D	22	4年	乃木坂46 日向坂46	欅坂46
E	22	9年	ももいろクローバーZ 私立恵比寿中学 乃木坂46	なし

調査は 2020 年 11 月から 12 月にかけて、表 1 の A、B、C、D、E の 5 名に対して半構造化インタビューをそれぞれ 2 回ずつ行った。対面あるいはテレビ電話を用いて、1 人あたり 1 回につき 10 分から 30 分程度の調査を行った。

1 回目のインタビューでは、「アイドルファンとしての活動」、「ファンとして活動してい

ときの気持ち」、「アイドルの魅力」の3点について自由に語ってもらった。これは、男性ファンを対象にした先行研究がほとんどないという状況を踏まえ、初めに彼らの活動を大まかに把握する必要があると考えたためである。インタビュー中に疑問点や不明点について筆者から質問を行うこともあった。

2回目のインタビューは、リサーチクエスションを検証すると同時に、1回目の結果から生じた問いや仮説を検証するために行われた。主に調査したポイントは、女性アイドルへのまなざしと認識、アイドルコミュニティでの経験、一般的な男性コミュニティでの経験である。調査項目を考える際、女性ファンを対象にした先行研究を参考にした。

本稿で引用される語りは、全てこのインタビューから得られたものである。

第3章 男性ファンの活動内容とファンコミュニティ

3.1 活動内容

インフォーマントから挙げられたファンとしての活動は、先行研究で紹介された女性ファンの活動と大差なく、次のようなものであった。テレビ番組やネット配信の視聴、楽曲の視聴、YouTube や DVD でライブ映像の視聴、ブログ・SNS のチェック、ライブやイベントへの参加などである。同じアイドルを応援するファンの友人と一緒にを行う活動としては、カラオケに行き応援するグループの曲を歌う、ライブやイベントに連れ立って参加する、コミュニティ内で意見や情報を共有するなどの活動が挙げられた。

男性ファン特有の活動としては、握手会への参加が挙げられる。女性アイドル業界では、ファンとメンバーが握手をしながら会話をする握手会、メンバーと一緒に写真を撮るチェキ会などの接触系イベントが定着している。今回のインフォーマントが応援しているグループの中では、前述したとおり乃木坂 46 と日向坂 46 が握手会を定期開催している。これらのグループをメインで応援している A、D は握手会への参加をファン活動のひとつとして挙げ、そこから得られる喜びについて言及した。

握手会で、直接会えるっていうのが、個人的にすごい画期的だなって思って、たぶん女優とかは、わかんないけど、そんな会えないのかな。けど、アイドルだったら会って、直接感謝を伝えられるっていうのが、個人的にはうれしいですね (A)。

(握手会では) 思った風にしゃべれんことの方が多いですけど、見ただけでもうれし

いというか、生で一目見ただけでもうれしいので、また来たいなあとも思うし、応援したいなあって気持ちにもなるし。なんかこう、良いですね、ライブの感想言えたりとかもできるし。すごい良い場所だなとは思います (D)。

両者の話からは、直接会えることや会話ができることへの感動がうかがえる。握手会での会話で伝える内容は「感謝」や「ライブの感想」であり、単純に相手への好意を伝えるような内容ではない。

A は、握手会における交流からメンバーに抱く印象が変わることもあると言う。

握手会で2人ペアとかの時があって、片方が推しだった場合。まあ行くんですけど、それでもう1人の子の、なんか良いじゃんとかあったりすることもあるので、そこでまたね、好きな子が増えて、どんどんはまっていくということですね (A)。

A は、握手会に行くことで、それまで特別応援しているわけではなかったメンバーの魅力に気づいた経験がある。直接メンバーと交流することで、メディアから一方向的に供給される情報以上のものを得られることが握手会の魅力のひとつであると考えられる。

一方で、B、D、E がメインで応援しているグループは、握手会をはじめとする接触系イベントをほとんど開催していないグループであり、グループの運営方針とそれに伴うファン活動の多様性には注意が必要である。

3.2 ファンコミュニティ

続いて、インフォーマントが所属する、アイドル愛好を通じてつながっているコミュニティについて尋ねた。セジウィックは、男性の連帯を分析する際に、2人の男性の間の関係も研究対象としていた。そのため、今回の研究では2人以上の男性からなる関係をコミュニティとして定義し、これを男性個人と対をなすものとして分析を行う。

表2はインフォーマントが挙げたコミュニティの成員数と、インフォーマントとの関係についてまとめたものである。なお、挙げられたコミュニティの成員は全て男性であった。いずれも2~4人の少人数のコミュニティで、インフォーマントと成員の関係はほとんどが学校関連でのつながりで、他には弟といった親族関係が挙げられた。全員が複数のコミュニティに所属しており、環境に応じてその都度コミュニティを形成していることがわかる。

表2 インフォーマントの所属コミュニティ

	成員数 (自らを含む)	インフォーマント との関係
A	4人	高校の同級生
	3人	大学の学科の同級生
	3人	大学のサークルの同期
	4人 (D含む)	中学校の同級生
B	3人 (C含む)	高校の同級生
	2人	同上
	2人	同上
	2人	同上
C	3人 (B含む)	高校の同級生
	2人	大学の同級生
D	4人 (A含む)	中学校の同級生
	3人	大学のサークルの同期
	3人	大学の学部の同級生
	3人	高校の同級生
	2人	兄弟
	2人	大学のクラスメイト
E	2人	大学の研究室の同期
	2人	親族
	2人	高校の同級生
	2人	高校の同級生

第3章では、男性ファンが普段行っている活動と彼らの所属するファンコミュニティについて説明した。応援しているグループや個人によって活動の程度や比重に違いはあるが、今回のインフォーマントはおおむね以上のような活動を行い、表2のようなコミュニティに所属しているという前提のもと、次章以降分析を進めていく。

第4章 男性ファンのまなざし

この章では、Q1「男性ファンは女性アイドルにどのようなまなざしを送っているか」について、インタビュー結果をもとに検証を行う。

4.1 アイドルの関係へのまなざし

女性ファンを対象にした先行研究では、ファンがアイドルグループのメンバー同士の関係に注目していることが指摘されていたが、男性ファンを対象とした今回の調査でも同様のまなざしが見られた。

卒業コンサートとか（略）は感動しますよね。なんだろう。みんな本当に、卒業する人も、グループのことを思っているし、残っているメンバーも、その卒業するメンバーのことを考えてて、仲間の絆というか。はい、そういうものを感じますね（A）。

（魅力は、）メンバーが仲が良いってことで、いい意味で上下関係がなかったり、シーンによってメンバー間での呼び名が変わるときとかあって、（略）普段プライベートでそんな感じで呼んでるのかなあって思ったりします（B）。

乃木坂すごい仲良いグループだと思うんで、そういうメンバー同士の絡みとかもすごい良くなって、ライブとかを見てても思う（D）。

「仲の良さ」への言及は、応援しているグループの魅力を語ってもらった際によく見られた。Aは、メンバーが卒業という形でグループを去る際に、卒業するメンバーのグループへの思い入れとメンバー同士の強い結びつきを見出し、「仲間の絆」を感じる。Bは、場面ごとにメンバー間の呼び名が変わることに注目し、そこから彼女たちのプライベートでの関係を垣間見ている。Dもメンバー同士の絡みから仲の良さを感じると語り、それぞれが異なる切り口から応援するグループの関係の良さを評価した。

Eはシニカルな視線を交えながら、グループの仲の良さに言及した。

ももクロはボロが出なかった。聞があるのかは知らないけど。それを見せないでいく

れた。それが良かった。仲良さそうやもん。仲良さそうなグループしか勝たん。現代ね、それがパブリックになるってことやから。今もうね、バチバチっていうのはね、一昔前の話。21世紀はそれじゃ通用しません。メンバー同士の仲が良くないとまずい。それで初めてファンがつく。公に認められるっていうのはそういうことだから。で、俺はそれに惹かれた (E)。

E は、ファンが知ることのできない領域でのメンバーの関係に「闇がある」かもしれないと冷静に考えながらも、少なくとも自分が見える領域では仲が良さそうだと評価し、「それに惹かれた」と発言した。最近のアイドルシーンで人気を得るには、仲の良さが欠かせない条件であるという意見も述べており、彼がグループの「仲の良さ」を重大なファクターとして位置づけていることがわかる。

この E の発言からは、アイドルには仕事などの公開される領域と私的で公開されない領域があり、ファンはグループの関係性のうち、表に出る一部しか見ていないという認識が読み取れる。その上で彼が期待しているのは、その2つの領域の間で「ボロ」や「闇」が見られず、公開された領域同様の親密性が私的な領域でも形成されていることだと言えるだろう。先に挙げた B の発言からも、ファンの目の届かないプライベートな領域を、「メンバー間での呼び名」の変化からうかがおうという関心が読み取れる。

4.2 多角的なまなざし

ここまではメンバー同士の関係性へのまなざしを紹介した。続いて、彼らがほかにアイドルのどのような部分に注目しているかを整理する。インフォーマントに応援するグループの魅力について話してもらった際、よく最初に挙げられたのは容姿や女性的魅力についてである。

(魅力は) もちろん、かわいい。かわいくて、見てるだけで癒される (A)。

魅力はまず、顔がかわいいっていうこと (B)。

メンバーが、そんなアイドルアイドルって感じじゃなくて、すごい清楚な感じで、色で表すなら水色みたいな。それがなんかいいなみたいな。アイドルっぽくない感じ。良い

意味で。(中略) 本当にかわいいなって、美人が多いなっていう (のが魅力) (D)。

僕が高校3年生のときの、秋ぐらいで M ステかなんか見てて、すごいこの歌いいなって思ったのと、すごいセンターの子かわいいなって思って、はまりました (D)。

(魅力は) 顔かな。入口はどうしてもね。顔見て一目ぼれしてさ、かわいいと思って好きになる。それがスタート。入口だよ。KARA もももクロもそうやった俺は (E)。

この4人からは「かわいい」という応援するアイドルの容姿を評価する発言が得られた。A、B、E はアイドルの魅力として真っ先に容姿を挙げたことから、外見的魅力が応援する大きな理由になっていると考えられる。その魅力は「癒される」ものであり、偶然目にした際に「すごいセンターの子かわいいな」と感じるなど、「一目ぼれ」によってアイドルを応援するきっかけにもなる。

一方で、メンバーの内面的な部分への関心も見られた。

(応援するグループの冠) 番組でも、それぞれの個性とか出るから、(中略) 新たな発見が知れるっていうのも、良い点ですよ (A)。

ツイッター、インスタグラムを見て情報を得る。(中略) その時の気持ちは、プライベートとかを全部知りたいなとかは思わないけど、少しでもプライベートを教えてくれたり、彼女たちの画像を載せてくれるのはうれしい (B)。

いろいろ昔のインタビューとか、インタビュー動画とか、インタビュー記事とか掘り起こして、「あ、こういう感じの考え方するんだ」みたいなのを知ったら、結構 (心が動く) (C)。

A が握手会でメンバーに新しい印象を抱いた経験については先に紹介したが、ここではテレビ番組を通してメンバーについて「新たな発見」ができることの魅力が語られた。B は、メンバーによる SNS の投稿を通して、プライベートな領域の一部を知ることができることに喜びを感じている。SNS の投稿は、メンバー同士のプライベートにおける関係が垣間見え、

彼女たちの親密性を確認できる場でもあるため、Bのこの発言は「仲の良さ」への関心にも関連するものだ。Cは、普段の活動からは知ることのできないメンバーの一面を、インタビュー記事などを通して知ることへの関心を示した。「昔のインタビュー」も「掘り起こして」読むという発言からは、現在の姿だけではなく、そこに至る背景や過去まで知りたいという強い探求心が読み取れる。

以上のことから、「(テレビの冠)番組」や「ツイッター、インスタグラム」といったSNS、「インタビュー動画」や「インタビュー記事」を通してメンバーの素顔や人柄といった内面的部分を知ることへの関心を読み取ることができる。

ほかに関心を集めていたのは、彼女たちのパフォーマンス力や楽曲といった、アーティストとしての側面である。

他のアイドルを決して否定するわけじゃないですけど、グループに一人くらいは、絶対歌があんまりうまくないけど、キャラがいいみたいな人がいたりするんですけど、自分の応援しているグループは、(歌やダンスが)下手な人がいないっていうのが、すごくなっていうのと、魅力的だなんて思います (B)。

歌が良いっていうのがあって、顔じゃなくて、歌が好きだから彼女たちが好きっていう、自信もって言うことができるくらい。顔で好きになったんじゃないよって言えるくらい、歌が良いなっていうのはあります (B)。

(魅力は)歌と、まあ楽曲。俺やっぱ大事な、楽曲が。やっぱり耳で聞く時間って多いからね (E)。

Bは、応援するグループのパフォーマンスに注目し、高く評価した。彼にとっては「顔で好きになったんじゃないよって言えるくらい、歌が良い」ことが大きな魅力であり、アーティストとしての実力も無視できないポイントなのだ。Eも同様に、楽曲を聞くことでアイドルに触れる時間が多いという理由から、楽曲が自分にとって大事な魅力だと語ってくれた。

Dは、楽曲への感動が現在応援するグループを好きになったきっかけだったという。

僕アイドルなんてぜんぜん興味なくて最初。本当に、(乃木坂46に)最初に感じた魅力

は、歌で、(中略) アイドルってなんか明るいキャッキヤしたような曲っていうイメージがあったんですけど、そういう曲じゃない曲をテレビ番組で聞いて、すごい良い曲だと思って(応援するようになった)(D)。

ファンになる以前は「明るいキャッキヤしたような曲」という、ステレオタイプ的なアイドル楽曲へのイメージを内面化していたが、「そういう曲じゃない曲」との出会いをきっかけにしてアイドルファンになった。ここからもアイドルグループにおける楽曲へのファンの強い関心を読み取れる。

ここまで、男性ファンの女性アイドルへのまなざしを分析した。彼らが注目するのは決して容姿だけではなく、アイドルの人柄やアーティスト性、あるいはメンバー同士での関係にも関心を持っている。外見的魅力を持った偶像としての側面、歌い踊るパフォーマーとしての側面、ステージ外やプライベートでの一個人としての側面、そして関係の中で見られる側面といったように、様々な角度から女性アイドルの姿を見つめ、多面的で深い理解を試みている。

このような視線は女性アイドルを一面的な存在ではなく、様々な表情を持ったリアリティのある存在として認識しようとする試みであると言える。男性ファンにとって彼女たちは、一方向からしか姿の見えない二次元的な存在ではなく、立体的で奥行きのある三次元的な存在であり、たしかに“リアルさ”を持っているのだ。

4.3 性的なまなざしの排除

男性ファンのまなざしは多角的であると分析したが、その一方で、「かわいい」といった評価以外には、女性アイドルを異性愛的な枠組みでとらえる語りが得られなかった。セジュウィックの理論装置では、異性愛の枠組みが男女を決定的に分断する役割を担っており、先行研究の女性ファンは、男性アイドルを“脱性的”な存在と位置づけることで彼らの男性的な部分を不可視化し、異性愛的枠組みから距離を置いていた。では男性ファンの場合、アイドルを決定的に異性たらしめる、性に関する部分はどのように認識されているのだろうか。

この点を検証するため、「応援するアイドルを性的に見ることはあるか？」という質問を行った。質問に対しては、5人のインフォーマント全員が「性的に見ていない」と回答した。

まずは「応援するアイドルを性的に見ることはあるか？」という質問に対する回答を分析する。

ないです。あえて、意図的にしないようにしている (E)。

俺は、アイドルでヌかない (=自慰行為をしない) ことにプライド持ってる (E)

それ (=性的に見ること) はないです。(中略) 知っている人を性的にあんま見れなくて。たぶんアイドルも、ちょっとそういう理由から来てるのかなって思います。(中略) ちょっと申し訳ないって感じになるんで (B)。

エロいみたいな感じは思うときはあるけど、別にそれを僕は性的っていう風にはみてないですね。そういう風に、あっちもそう感じさせるように写真とか撮ってると思うので。それは、そう感じてほしいからその人たちも、ああいう写真を撮るから。別にそういうのは性的な目では見てないですね (D)。

人によりますが、普通に水着とかだとエッチだなとは思いますがね。ただ、性欲発散の対象というか、そういうふうには見てないですね。いいなとは思いますが (A)。

性が一番に来ないというか。なんか、全くないと言ったら嘘になるかもしれないんですけど、性的な欲求より好きが上に来ているという感じですね (A)。

E は、意識的にアイドルを性的に見ないようにしていて、そこに「プライド持ってる」と語った。E はアイドルの魅力として「かわいさ」、つまり女性的な魅力を真っ先に挙げていたが、彼女たちに性的な視線を送ることには抵抗を見せた。B の性的に見ることが「申し訳ない」という発言と合わせて解釈すると、女性としての魅力は認識しているが、多面的に理解しているアイドルを、身体的な魅力という表層にのみ注目することで性的な枠組みに押し込めることに抵抗感を抱いていると解釈できる。

A と D がメインで応援している乃木坂 46 と日向坂 46 は、メンバーが写真集の撮影で水着姿などのセクシーな姿を見せることがある。そのような姿に対して両者ともに「エッチ」「エロい」という表現で性的魅力への認識を示しているが、D は「あっちもそう感じさせるように写真とか撮ってると思う」と、あくまで送り手が込めたメッセージとして受け取り、

Aは「性的な欲求より好きが上に来ている」ため、彼女たちには積極的に性的なまなざしを向けないという。

このような視線は、はっきりとアイドルの女性としての魅力を認識しているという点で、先行研究における女性ファンのように、アイドルをジェンダー二分法から自由な“脱性的”な存在ととらえているとは言えない。しかし、インフォーマント全員が「性的に見ていない」と答えたように、女性アイドルを性的に消費することはない。このことから彼らのまなざしは、“脱性的”ではないが“非性的”であると言える。男性ファンがアイドルへ送る多角的な視線からは、性的な側面に注目するまなざしを実質的に排除されていると言えるだろう。男性ファンは彼女たちを自分の中で“非性化”することで、異性愛による分断を防ぎ、彼女たちを理解不能な他者ではなく、多面的な理解が可能な存在として位置づけているのである。

本章の分析結果に基づくと、Q1への回答は「男性ファンは女性アイドルに多角的で非性的なまなざしを送っている」となる。

第5章 ファンとコミュニティの関係

前章の分析を受け、次に考えるべきは、Q2「女性アイドルへのまなざしはファン個人とファンコミュニティでいかに関係しているか」、Q3「ファンコミュニティにおける女性アイドルへのまなざしと他の男性コミュニティにおける女性へのまなざしはどう異なるか」についてである。第1章で述べたように、家父長制において、男性個人と男性集団は強固に結びついている。そのため、男性ファン個人が女性アイドルを非性化、非他者化しているのも、彼らのファンコミュニティと無関係ではないと考えられる。ここからは、コミュニティに分析の焦点を移し、ファンたちの中で女性アイドルがどのような存在として位置づけられているかを検証する。

5.1 個人とコミュニティのまなざしの一致

コミュニティにおいてアイドルがどのように注目されるかについては、以下のような発言が得られた。

動画を見て、このしぐさがかわいいとか、曲を聞いてこの歌が好きとか、そういう話が多い（E）。

単純に可愛さというか顔、あとまあなんだろうね、素振りというか、そういうことの可愛さが一番大きいのかな (C)。

番組等での面白い発言や、かわいいシーンなど (中略) 彼女たち自身のことについて話しますね (A)。

そのアイドル活動をしている彼女たちの顔っていうか、「かわいいな」とか、そういうところもそうだし、新曲が出たら「新曲いいな」みたいな、楽曲もそうだし、あとは、なんだろう。バラエティ番組とかあるじゃないですか。そのアイドルがやってる、「乃木坂工事中」とか。その「今週のこういうところ面白かったよね」みたいな、盛り上がった。あとなんか、「ライブいつの行く？」とか、ライブの感想言い合ったり (D)。

しきりに (アイドルへの敬意を話題に) している感じがしますね。「やっぱすごいな」みたいな。(中略) がんばっている姿を映像とかで見たりすると、すごいなっとなります。

(中略) 顔のこともそうですし、あと楽曲の良さ。と、歌声に関してだったり、あとは SNS に彼女たち、またはそのグループの公式があげた写真とかについて話すことが多いです (B)。

5人全員が「顔」などの容姿、あるいは「素振り」や「しぐさ」、「発言」などの言動の「可愛さ」を話題にすると語った。他に挙げられたのは楽曲、「歌声」や「ライブの感想」といったパフォーマンス、SNS についてである。具体的な会話内容についての発言はあまり得られなかったが、ここで挙げられた話題のポイントは、ファン個人が注目するポイントとおおむね共通しており、個人同様、コミュニティでも女性アイドルの様々な側面に対して視線が送られ、多面的な理解が試みられていることがわかる。

一方で、性的な部分に対する言及はここでも聞かれなかった。そこで、女性アイドルへの非性的なまなざしはアイドル愛好を通してつながっている男性コミュニティの中でも共有されているか尋ねたところ、インフォーマント全員が肯定的な回答をした。

(コミュニティの成員も性的に見ては) ないかなと思ってる。なんかネタとかで言う人はいるかもしれないけど、本当では違うんだろうなというようなことを感じたりす

るけど。(中略) ネタとして受け入れている感じ (C)。

そういう話があんまり、したことがない気がするんで、共有されてるんじゃないかなと思います (B)。

(コミュニティの成員はアイドルを) 尊敬はしてると思いますし、本気で性的な目で見ている方はいないと思いますね (A)。

B と C は同じコミュニティに所属している。C は、アイドルの性的な部分についてはコミュニティ内で言及されることもあるが、それは「本当では違う」もので、「ネタとして受け入れ」られていると感じている。一方で B は性的な部分についての会話はそもそもしていないという認識だった。この2人の認識の食い違いは、女性アイドルの性的な部分への言及はコミュニティの中で冗談として扱われ、発言のリアリティを奪われているため生じたと考えられる。すなわち、性的な部分への言及は発話としてはなされているが、それがセクシュアルな話題だと意識されないほどに冗談化されていると解釈できる。A も同様に「本気で性的な目で見ている方はいない」と発言しており、女性アイドルを性的に見ない非性的なまなざしはコミュニティの中で共有されていると言えるだろう。

以上の分析から、女性アイドルに対する多角的で非性的なまなざしは、個人とコミュニティで共有されていると言える。男性ファン個人とファンコミュニティは、女性アイドルを同様の視線をもって見つめる関係にあると言える。

5.2 他の男性コミュニティにおける経験との比較

このようなファンコミュニティの特徴は、インフォーマントがこれまでに経験してきたアイドルコミュニティ以外の男性集団と比較することでより際立つ。

「ファンコミュニティ以外の男性だけの場で女性はどうに話題になったか？」という質問を行った。まず、話題にのぼる女性については大きく分けて2パターンの女性が挙げられた。「友人」、「同世代」、「同級生」、「大学にいる女の子」といった身近な女性と、「芸能人」である。

それぞれがどのように話題になっていたかについて、以下の回答から分析する。

同世代の話が多いから、やっぱり恋愛対象じゃないですか。あと、芸能人とかの話することもあったな、モデルさんとか。それは、恋愛って感じじゃないか。性的搾取？違うかな。なんかただ単にかわいい、見てて癒される、そういう話だったかな。(E)。

付き合いたいとかそういうことを言ってる人もたくさんいたし、それこそ「あの子かわいいよね」みたいな話は結構多いイメージはありますね (C)。

男だけだったらやっぱ、その、なんだ、まあエロ系のことは話題に上りますよね。女性だと。(中略) 同級生だったり、芸能人だったり。まあいろいろですね。(中略) 容姿は注目されますよね。だれだれかわいい、きれいとか。かわいかったりきれいだったりするともちろん話題に上がるし。性格で言うと逆に悪い面とかあったりすると、話題に上っちゃったりしますかね (A)。

話題に取り上げられてて、今人气がすごいある女性とか。そういう人が、「かわいいよね」とか、そういうところですね。アイドルオタクの人たちとじゃない飲み場だったら、そういう人気がある女性の芸能人の人とかに注目が集まりますね。(中略) 乃木坂知らん人でも「白石麻衣って人卒業するよね」みたいな、そういう会話とか。基本的に全国民から目が向くような。(中略) 芸能人の人とかだと、「白石麻衣かわいいよね」とか、普通の人とかだったら、「あの歌いいよね」とかで終わるけど、周りの人の、大学にいる女の子とかが注目されるってなると、「だれと付き合ってるの?」とか、「彼氏いるのかなあ」みたいな。とかですかね。「あの子と仲良いよね」みたいな。「サークルどこ入ってたろう」とか (D)

芸能人のことだったり、(中略) あとは友達のこととかですね。(芸能人の場合は) 僕はあんまり参加はしないんですけど、「めちゃくちゃかわいいよね」とか。だれかがインスタとかを開いて、「これかわいいよね」とか。「あのドラマがかわいかったよね」とか、そういうのが多いです。(中略) 友達は、「あの子かわいいね」。普通ですけど。「やっぱりかわいいね」とか (B)。

芸能人の女性の場合、「ただ単にかわいい、見てて癒される」、「めちゃくちゃかわいいよ

ね」のように、「容姿」が注目されたり、「白石麻衣って人卒業するよね」、「あのドラマがかわかったよね」のような、メディアや SNS を通して、だれもが知りえる情報が話題になったりすることがわかる。身近な女性の場合も「あの子かわいいね」のように「容姿」が注目されているが、「恋愛対象」として語られる点で芸能人の場合と異なる。身近な女性は「だれと付き合ってるの?」、「彼氏いるのかなあ」といった形で話題にのぼり、「付き合いたい」といった感情が向けられる。そして時には、「エロ系」の話題の対象になることもある。

インフォーマントが経験してきた男性集団においては、身近にいて、容姿のみならず性格や人柄まで知りえる女性の場合は、主に恋愛対象としての視線が向けられる。これは異性愛的枠組みで彼女たちをとらえる行為である。一方で、芸能人のような身近でない遠い存在の場合は、外見的特徴やだれもが知っている情報といった、表面的な部分に取り上げられて会話がなされる。これは彼女たちが男性間のコミュニケーションの手段として利用されていると言い換えることができる。

さらに深く検証するため、「アイドルコミュニティにおける女性アイドルの語られ方と、他の男性コミュニティにおける女性の語られ方を比較するとどうか?」という質問を行い、以下のような回答を得た。

アイドルコミュニティの方が、そのアイドルのことを本気で考えてると言うか。好きだから。何ですかね。その、一般のコミュニティでは別に話題にあがるけど、自分にとってはまあ、わりとどうでもいい人の話だけど、アイドルだと自分も好きなんで、なんだろう。より熱意というか、そういうのはありますね (A)。

アイドルコミュニティで話すときは結構その女性に対して、さっきも言ったんですけど尊敬してるみたいな話が多いんですけど、それ以外のコミュニティだと、その話されてる対象を、尊敬しているとかはないです。芸能人でも友達でも (B)。

普通の人たちだったら「かわいいね」とかで、他愛もない会話で終わるけど、(アイドルコミュニティでは)「ああいうところが良いよね」みたいな、もっとなんか、「こういう歌うたってほしいよね」とか、もっと深い話ができますね。(中略) もっともっとその人について深い話をしてる気がします (D)。

オタクの人もぜんぜん、悪い人もいるかもしれないけど、基本関わってきた人はみんな良い人だし、そういうの（＝アイドルについての話題）共有できるのは楽しい（D）

インフォーマントの実感で相違点として挙げられたのは、「熱意」、「尊敬」、「深い話」という点である。Aは、「一般のコミュニティ」では「自分にとってはまあ、わりとどうでもいい人の話」が、Dは「普通の人たち」との間では「他愛もない会話」がなされていると語る。インタビューの文脈上、「一般のコミュニティ」はアイドルコミュニティ以外の男性コミュニティ、「普通の人たち」はアイドルファンでない男性を指すと思われるが、「どうでもいい人」について「他愛もない会話」をするのは、同性間の関係が優先されているためだと考えられる。これは女性の他者化によって男性集団の結びつきを強める実践であると解釈でき、セジウィックの指摘との一致が見られる。アイドルコミュニティ以外では話題に上がる女性への尊敬は必ずしもないというBの発言も、女性の他者化を示唆していると言える。

一方でアイドルコミュニティについてAは、「そのアイドルのことを本気で考えて」おり、「より熱意」があると感じ、Bは「尊敬してるみたいな話が多い」、Dは「もっとその人について深い話をしてる」と感じている。上の分析と対比させると、ここでは自分にとって“どうでもよくない”アイドルについて、“他愛もある”会話がなされていると解釈できる。

彼らの所属するアイドルコミュニティは決して1つではない。中学校、高校、大学の学部、サークル、研究室など、その時に置かれた環境の中で、特定のアイドルグループを応援しているという共通点をきっかけにコミュニティを形成している。これは、彼らにとって、コミュニティはその成員よりもそこで話される内容が優先されていることを意味している。すなわち、連帯のためにアイドルについて語り合うのではなく、アイドルについて語り合えるから連帯が生まれるのだ。ファンコミュニティでは、アイドルについての話題を「共有」する、「深い話」をすることが目的であり、男性間の関係を強化することよりも優先されていると言えよう。

ここまでをまとめると、アイドルコミュニティにおける女性アイドルの語られ方の特徴が浮かび上がってくる。男性ファンにとって、女性アイドルは本来遠い存在である。しかし彼女たちは様々な角度からの視線によってリアリティのある存在としてイメージされており、ファンしか知らないような知識をもとにした会話がなされる。この点で他の男性コミュニティで女性芸能人が話題になる場合とは異なっている。一方で、深くまで知りえるからといって身近な女性と同じように恋愛対象として語られるわけでもない。彼女たちは非性的な存在

として認識され、家父長制における他者化の論理から距離のある存在として位置づけられていた。この特殊な位置づけによって彼女たちは男性コミュニティの手段ではなく目的となり、セジウィックの指摘したホモソーシャル的な男性集団における女性とは異なる位置づけを見出すことができる。

よって、Q2 には、「ファン個人とファンコミュニティは強く結びついており、まなざしを共有している」と回答でき、Q3 については、「ファンコミュニティにおいて女性アイドルは連帯の目的であり、他の男性コミュニティで女性が連帯の手段とされたり異性愛の枠組みで語られたりするのとは異なる」と回答できるだろう。

第6章 鏡としてのアイドル

前章までの分析を踏まえ、本章では再びファン個人に焦点を戻し、Q1「男性ファンは女性アイドルにどのようなまなざしを送っているか」について再度検証する。このような特徴を持つコミュニティに所属することで、彼らにとって女性アイドルはどのような存在として現れてくるのだろうか。

インフォーマントが、アイドルを「すごい」と敬意をこめて評価したり、アイドルを見ることで「頑張れる」と自分の行動への影響を認めたりした発言に注目する。以下は、アーティスト性や人柄を「すごい」と称賛する発言である。

自分の応援しているグループは、下手な人がいないっていうのがすごいなっていうのと、魅力的だなんて思います。それも、元からみんなクソうまいとかじゃなくて、だんだんうまくなっていったっていうのが、またいいなと思います。(B)

(魅力は、) プロ意識が高いっていうので、SNS の更新頻度が高くて。昔体調が悪くてもステージに立とうとした子もいて、ライブ中に。自分の体調より仕事を優先するっていうのは普通に考えたらちょっと、できないことなんで、それはすごいプロ意識だなって (B)

行動するときは、これは今まで続いているんだけど、彼女たちならどうするのかなんて一瞬考えちゃうまだ。行動指針になってる。めっちゃ良い子たちなんだもん。素晴らしい。思えばあれが 10 代でできてるって考えられない。アンビリバボー (E)。

Bの1つ目の発言は、グループ内の全員がレベルの高いパフォーマンスを見せることへの「すごい」という評価と、「だんだんうまくなっていった」という成長の過程への注目が見られる。2つ目の発言では、応援するグループのメンバーが、体調不良を押してライブに出演したことに感心し、その「プロ意識」を称賛した。Eは、メンバーは「めっちゃ良い子たち」で人柄が「素晴らしい」と絶賛し、自らの「行動指針」にまでしているという。

AとBは、アイドルを見ることで力が得られると回答した。

メンバーも選抜とかあるわけで、それぞれ頑張ってる姿っていうのもあるんですけど、こんなかわいい子たちが頑張っているのを見ると元気がもらえるし、自分も頑張ろうって思いますね。(中略)そういう頑張る力をくれるのが魅力ですかね(A)。

自分と歳が近いってことで、平均年齢が21歳くらいなんで、自分も頑張ろうっていう刺激がもらえるっていうのがあります(B)。

A、Bともに、アイドルの姿を見て「自分も頑張ろう」という「元気」や「刺激」を得ている。Bは、応援しているアイドルが「自分と歳が近い」という共通点があるから刺激を得られると語っており、彼女たちを自分に引きつけて認識している。

このように、男性ファンが女性アイドルに敬意を抱き、自らの行動に刺激や影響を受けていることが明らかになった。この結果を踏まえ、「応援しているアイドルは尊敬できるか？」という質問を行ったところ、インフォーマント全員が「尊敬できる」と回答し、具体的に尊敬するポイントを以下のように挙げた。

人間性だよな、思いやり？うん。模範的な行動を瞬間的にやってるよね。脊髄反射レベルで。(中略)尊敬できるところは具体的にそんな感じ。(中略)なんか、人間として美しい行動をいつもしているような気がします(E)。

仕事に対しての熱意がすごいと思うので。自分もアルバイトをしてるんですけど、そこまで、飲食店でアルバイトしてるんですけど、そこまでお客さんのこと真剣に考えられないんで。でも彼女たちは結構ファンのこと考えてくれてるなっていうのがわかるんで、

まあ実際はどうかわかんないですけど。そこが凄いなって思います (B)。

頑張ってる姿など見てるので、そういった部分は素直に尊敬できますね (A)。

もちろんアイドルとしての活動もそうだけど、どんどん、1人1人やっぱ特技とかあって、女優業とかもどんどんつかんでいく人だったり、テレビ番組での、自分のキャラを出してバラエティとかにもいっぱい出て、まあそうやって、どんどんアイドルだけじゃなくて、こうやって変わっていくっていうのもすごいなと思うし。そもそも、ライブとかでこんな自分たち一般人を感動させるってこともすごいなと思うので (D)。

人を笑顔にできる仕事っていうところがひとつかな。自分自身も笑顔にさせられてきたというか、そういう経験もアイドルからあるし、それがまずひとつすごいなっていう (C)。

E は人間性について言及した。「模範的な行動」、「人間として美しい行動」をいつも「瞬間的にやってる」と、思いやりを持った行動を称えた。B も、メンバーの「仕事に対しての熱意」という内面的な部分への尊敬を示した。A と D は、メンバーの「頑張ってる姿」や、それぞれが個性を生かしてステップアップする姿、言い換えると目標の実現に向けて努力する姿を尊敬の理由として挙げた。D は後半部分でアイドルという仕事の意義にふれ、「ライブとかでこんな自分たち一般人を感動させる」ことを「すごい」と評価し、C もアイドルの仕事が「人を笑顔にできる仕事」であるという同様のポイントに言及して尊敬の理由を語った。C は続けて以下のように発言した。

継続してるっていうのがすごいなっていう。尊敬できるかなって思ってた。理由としては僕があんま継続力がないタイプだから、結構。なんか途中でやめたりすることも多かった中で、それはまあ、いろんな人がそうだと思うんだけど、ずっとアイドルを続けるっていうのは素直に尊敬できるかなって思ってるかな (C)。

C は、「ずっとアイドルを続けてる」という「継続力」を尊敬していると語った。これは、自分が「継続力がないタイプ」で「途中でやめたりすることも多かった」からであり、自分との比較を通してアイドルに対する尊敬の念を抱いていると言える。

同様の発言は先に挙げた B、E の発言にも見られる。B は、自分がアルバイトとして働いている際には「そこまでお客さんのこと真剣に考えれない」が、アイドルは「結構ファンのこと考えてくれてる」と感じている。自分と彼女たちを比較して、「仕事に対しての熱意」の強さに敬意を抱いているのだ。E はメンバーの行動を「模範的」、「人間として美しい」と感じ、「行動指針」として内面化している。自分が行動する際に、常にメンバーの行動と比較して自らを顧みているのである。

A や B が、アイドルが一生懸命に活動する姿を見て「自分も頑張ろう」と感じると語ったことも、頑張るアイドルと自分を比較した結果、彼女たちのように自分も頑張らなくてはと感じたからだと言えるだろう。

ここまで見てきたように、男性ファンは、アイドルを自分に引きつけて比較することで、自分より優れた部分、自分に不足している部分をアイドルに見出し、尊敬の念を抱いている。そして、彼女たちの姿を通して自らの行動を顧みることによって「行動指針」や「頑張ろう」というモチベーションを得て、自分の行動を変化させているのだ。ここでは女性アイドルの姿を見つめることが、同時に自らを見つめなおすことになっており、女性アイドルが“自分を映す鏡”のような役割を果たしていると言える。

そして、女性アイドルと自分自身をこのように比較することができるのは、多角的で非性的なまなざしによって彼女たちを異性愛的枠組みから離れた場所に位置づけ、彼女たちについてのリアリティのあるイメージを獲得しているからである。このまなざしはコミュニティと共有されることでさらに強化され、彼女たちの立ち位置の特殊性を強めている。こうして男性ファンは女性アイドルとの間に断絶を生じさせることなく、理解可能な、自らと連続する存在として認識することができるのだ。

第 7 章 男性ファン再考

前章までの分析結果をまとめ、考察を行う。

男性ファンは容姿、人柄、アーティスト性、メンバーとの関係など、女性アイドルの様々な側面に注目する多角的なまなざしを送り、彼女たちをリアリティのある存在として捉えている。しかし、彼女たちを性的に見つめるまなざしは実質的に排除されており、彼らのまなざしは非性的である。この多角的で非性的なまなざしはコミュニティでも共有されており、女性アイドルは非性化されたことで異性愛的枠組みの外に位置づけられ、他者化を免れたことで男性の連帯のための手段ではなく目的となる。身近な女性や他の女性芸能人と比較する

と、女性アイドルは深い理解がされながらも異性愛の枠組みに回収されないという点で位置づけの特殊さが際立つ。他者化されない彼女たちは、インフォーマントにとって自分に引きつけて理解することが可能な、自らと連続する存在となる。これにより男性ファンは、女性アイドルを“鏡”として自らを見つめ直したり、行動を顧みたりすることができる。

この分析結果が表す男性ファン像をステレオタイプと比較する。これまで男性ファンは現実の女性に向けるのと同じ欲望をアイドルに向け、「所有」を志向しているとイメージされていた。その姿勢は虚構と現実を混同しているように映り、同時に家父長制的な性格が見出されていたのである。

しかし、実際にインフォーマントの語りから浮かび上がった男性ファン像は、必ずしも女性アイドルを恋愛や性の対象として見ておらず、同時に彼女たちを他者化していなかった。この点でステレオタイプとは異なった性格を見出すことができると言えるだろう。

一方で、男性ファンが本来虚構であるアイドルを現実の存在としてとらえているように見えるという吉澤（2012）の指摘は、今回の分析結果と適合的である。インフォーマントは女性アイドルを多面的に理解し、リアリティを獲得しようとしていた。問題なのは、ファンのまなざしを単純に異性愛の枠組みで理解しようとするることである。彼らは単に恋愛や性の対象として女性アイドルに熱中しているわけではない。それを異性愛の枠組みで理解しようとすると、男性ファンがアイドルの虚構性を見誤り、彼女たちを欲望の対象としてとらえているように見え、誤ったステレオタイプを生み出してしまうのである。

では本論の一番大きな問いに目を向ける。彼らの実践は家父長制とどのような関係にあると言えるのだろうか。結論を先取りすると、男性ファンによる実践は、男性個人と男性集団の強固な結びつきという家父長制的な仕組みを利用しながら、その内実を変化させるものである。

家父長制の下で女性アイドルと向き合おうとするとき、男性個人がとりうる対応として想定されるのは、異性愛の枠組みにくだり男性集団に参加するか、枠組みから外れ集団に背くかである。前者は家父長制の維持に加担することであり、アイドルへの熱い気持ちに対して男性集団から理解は得られるが、彼女たちは自らと断絶した存在として位置づけられるため、一面的な理解にとどまってしまう。後者の場合は、望み通り異性愛の枠組みから離れてアイドルと向き合えるが、男性コミュニティからは非異性愛者の烙印を押され、放逐される危険性生まれる。いずれの選択もネガティブな部分を拭い去ることはできない。

分析結果が示す男性ファンの実践は、このような家父長制的なジレンマを克服したオルタ

ナティブな選択肢を示している。インフォーマントはアイドル愛好を通じてファンコミュニティを形成する。そしてそのコミュニティの中で、「女性アイドルを異性愛の枠組みで見ず、他者化しない」という反家父長制的なまなざしを共有する。これにより、彼らは男性コミュニティから放逐されるリスクを取り除くことができ、同時に個人レベルでも、女性アイドルを異性愛的な枠組みから離れた場所に位置づけて向き合うことが可能になるのだ。男性コミュニティを利用することで、個人レベルで取り組むとネガティブな結果に陥りうる実践を実現している。

彼らはほかの男性コミュニティにも身を置き、完全に従来のジェンダー構造から自由になったわけではない。身近な女性や女性芸能人に向き合うとき、ホモソーシャル的なコミュニティの中で、集団適合的なふるまいをすることもある。この点では、女性に対して二面的なふるまいをしているとも言える。しかし、女性アイドルと向き合う際は、従来の男性の論理に支配されないまなざしを向け、自らと連続させて理解を試みている。これは、家父長制から距離をとった実践であると言えるのではないか。

ではこのような実践にどのような意義を見出すことができるだろうか。これについては、宮台真司・辻泉（2009）の論考が参考になる。彼らは、男らしさに関わる問題への処方箋として、ジュディス・バトラーの著作を参照しながら、既存の「ホモソーシャルリティ」を仮の支えとして、とりあえずそこに身を置きつつも、内側から「男らしさ」を徐々にずらしていくのがよいという提案を行った（宮台・辻ほか 2009：285-286）。つまり、既存のジェンダー構造を支える「ホモソーシャルリティ」を頭ごなしに否定するのではなく、当面はそれを利用して、新たな構造を模索していくのがよいということである。男性ファンの実践は、個人と強く結びついた男性コミュニティを利用している。そこで共有する規範を変えることで、男性個人を、男性集団からの要請と個人レベルでの女性への向き合い方の間のジレンマから解放するという点で、まさにこの処方箋の実践例であると言えるだろう。

昨今のジェンダー研究による知見は、人々に新たな知識を与えて啓蒙し、従来の価値観や社会構造への批判的再考を促している。それはもちろん男性にとっても例外ではない。しかし一方で、男性は従来の社会構造の中で強固に集団と結びつけられており、個人のみの実践で価値観や行動を変化させるのは容易ではない。そのような状況においては、従来のように集団を作り、そこを基盤にしながら、内部から既存の仕組みを変容させていくことが有効だ。ジェンダーをめぐる激しい変化が見られる現代社会において、その変化に対応する実践の1つとして、女性アイドルの男性ファンを参照できるのではないだろうか。

参考文献

- 東園子, 2007, 「女同士が見せる夢——ファンは『宝塚』をどう見ているか」 玉川博章等編『それぞれのファン研究 I am a fan』風塵社, 203-241.
- 東園子, 2015, 『宝塚・やおい、愛の読み替え 女性とポピュラーカルチャーの社会学』新曜社.
- 上野千鶴子, 2015, 『発情装置 新版』岩波書店.
- 上野千鶴子, 2018, 『女ざらいーニッポンのミソジニー』朝日新聞出版.
- 江原由美子, 2001, 『ジェンダー秩序』勁草書房.
- 工藤保則・寺岡伸悟・宮垣元編, 2010, 『質的調査の方法—都市・文化・メディアの感じ方』法律文化社.
- 千田有紀, 2009, 『ヒューマニティーズ 女性学／男性学』岩波書店.
- 臺純子・幸田麻里子・崔錦珍, 2018「ファンツーリズムの基本的構造—アイドルファンへの聞き取り調査から—」『立教大学観光学部紀要』20, 123-131.
- 田中俊之, 2009, 『男性学の新展開』青弓社.
- 陳怡禎, 2014a, 『台湾ジャニーズファン研究』青弓社.
- 陳怡禎, 2014b, 「男性アイドルの関係性に「友情」を求める女性たち：台湾におけるジャニーズ・ファンを事例として」『情報学研究：学環：東京大学大学院情報学環紀要』86, 159-173.
- 辻泉, 2007, 「関係性の楽園/地獄——ジャニーズ系アイドルをめぐるファンたちのコミュニケーション」 玉川博章等編『それぞれのファン研究 I am a fan』風塵社, 243-289.
- 辻泉, 2014, 「『観察者化』するファン～流動化社会への適応形態として」『アド・スタディーズ』40, 28-33, (http://www.yhmf.jp/pdf/activity/adstudies/vol_40_01_05.pdf, 2020.11.19).
- 徳田真帆, 2010, 「ジャニーズファンの思考」『くにたち人類学研究』, 5, 21-46.
- 姫乃たま, 2017, 『職業としての地下アイドル』朝日新聞出版.
- 溝口彰子, 2015, 『BL 進化論』太田出版.
- 宮台真司・辻泉・岡井崇之編, 2009, 「『男らしさ』の快楽—ポピュラー文化からみたその実態」 勁草書房.
- 吉澤夏子, 2012, 「『個人的なもの』と想像力」 勁草書房.
- Sedwick, Eve, Kosofsky, 1985, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*.

New York: Columbia University Press (= 2001, 上原早苗・亀澤美由紀訳『男同士の絆
ーイギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会)。

「400 字詰め原稿用紙 78 枚相当」